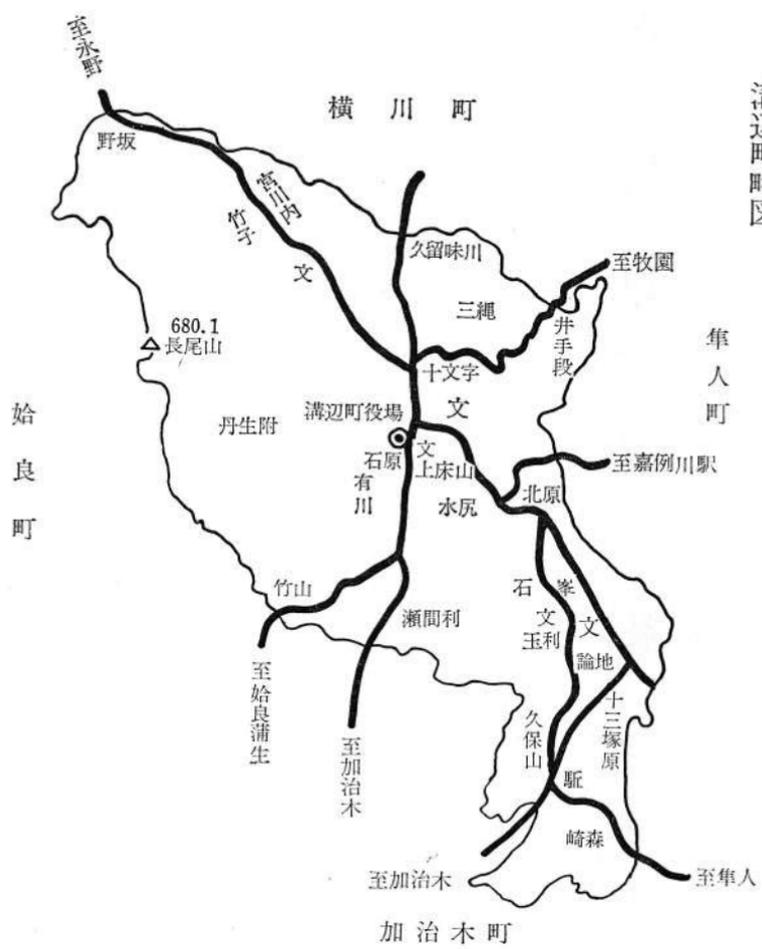


第一
部
地
誌
編



溝辺町略図



隼人町

始良町

第一章 位置・面積

第一節 位置

溝辺町は鹿児島県のほぼ中央部、始良郡の西部に属し、鹿児島市より東北約三五キロメートルの高台地にあつて、東は隼人町、南は加治木町、西は始良町、北は横川町の四ヶ町に接している。

註 明治三年の薩隅日地理纂考によると、

大隅の国溝辺郷は鹿児島を隔たること、子の方八里、東、襲山、南、国府、加治木、西、山田、北、横川の五ヶ郷に接す。

周廻一三里二六町五三間、村落五、有川村、三縄村、竹子村、麓村、崎森村……云云とある。

町内特定の位置とその標高を示せば、次のようである

位置	地域	東 經	北 緯	標 高
中心地	役場付近	度分秒	度分秒	二四九m
東	麓中野	一一〇・四〇・〇〇	三一・四九・三〇	二八一
西	有川丹生附	一一〇・四二・〇〇	三一・四九・三〇	二八一
南	崎森桑の丸	一一〇・三六・〇〇	三一・四九・三〇	二八〇
南東	隼人町境	一一〇・三三・〇〇	三一・四五・二〇	二五〇
北	竹子野坂	一一〇・三三・〇〇	三一・四五・二〇	二五〇
北北西	横川町境	一一〇・三六・〇〇	三一・五二・五〇	二八五

第二節 面積

本町は有川、崎森、三縄、竹子、麓が加治木町の区域にあつたが、慶安年間に分離して溝辺町となつた。

昭和二十三年十月三十一日、崎森長谷部落戸数二六戸人口一六六人、面積〇・三五平方キロメートル、昭和二十七年十月一日、崎森迫部落戸数五三戸、人口二八五人面積〇・六八平方キロメートルがそれぞれ加治木町に合併編入された。

現在の面積は、六四・四五平方キロメートル。地形は東西六七キロメートル、南北一六・〇キロメートルで北西から南東に斜走する方錘形をなしている。

行政区画は現在でも 有川、竹子、三縄、麓、崎森の五つの大字になっている。

大字別面積は、

有川	一八・〇三平方キロメートル
竹子	一八・一〇平方キロメートル
三縄	七・一〇平方キロメートル
麓	一五・二九平方キロメートル
崎森	五・九二平方キロメートル
計	六四・四五平方キロメートル

これを地目別に示せば次のとおりである。

鹿児島県図から溝辺町の位置を示す。



総面積

六四・四五平方キロメートル

耕地

一、六九六ヘクタール

S 四十四年県統計
以下S四十三—四十二農林統計

水田

三三六ヘクタール

畑

一、三六〇ヘクタール

普通畑

一、二一〇ヘクタール

樹園地

一五〇ヘクタール

山林 三、九四九ヘクタール

国有林 九六一ヘクタール

公有林 一七三ヘクタール

私有林 二、八一五ヘクタール

宅地 九五ヘクタール

その他 七〇五ヘクタール

参考文献

1 加治木町郷土史

2 薩隅日地理纂考

第二章 地形・地質

第一節 地形

本町の地形は、中央の高屋山陵によっておおむね南北に二分され、その地帯も対照的な様相を呈している。

すなわち東南方は平地に富み、水尻原から十三塚原に連なり隼人町境ならびに加治木町境に至る約一〇キロメートルにわたる高台の平地は、昔からかんがい水利の便に恵まれず、したがってほとんどが畑地であり、その間に若干の谷間に階段状のせまい水田があり、またわずか

に山林が散在しているに過ぎない。

この地域の東南部の高台に新鹿兒島空港が建設されたのである。

一方西北方地帯は主として山岳地帯を形成し、国有林長尾山系の稜線は始良町との境界線をなし南北に走っている。またその山系の東南方の山麓地帯はほとんどが私有林である。

本町の主要河川は、みな長尾山系にその源を發し、そ

の流域地帯には水田が形成分布され、農業水田耕作と密接な關係を保持している。

最西北端の横川町境の長尾山に源を發する久留味川は横川町境の溪谷を貫流して天降川の本流に合流、大字竹子の東北部宮原水田地帯と、大字三繩地区水田地帯のかがい水となる。

長尾国有林の中央東端に源を發する網掛川の上流は、竹子の中心部を東南に走り、有川を経て加治木町小山田

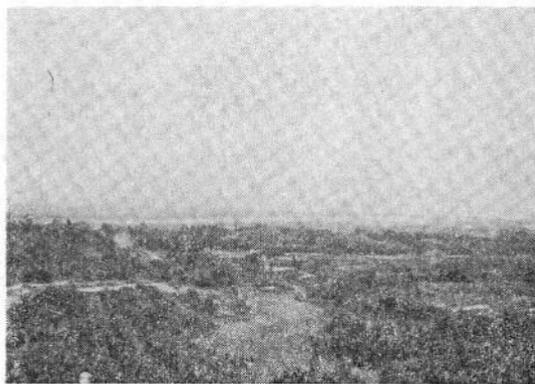
そして錦江湾に注ぐ。この水流は竹子、有川の水田地帯をうるおしている。

そのほか長尾国有林の西南に源を發し、本町の西部山間地帯の溪谷を縫って流れる宇曾木川は木場、丹生附を経て加治木町木田で網掛川に合流する。

以上三筋の河川地帯は本町の主要水田地帯を形成するとはいっても水量は少なく、農業用水に恵まれぬ立地条件が町産業發展に宿命的な要因をなしていることを否定できない。



長尾山系の遠景



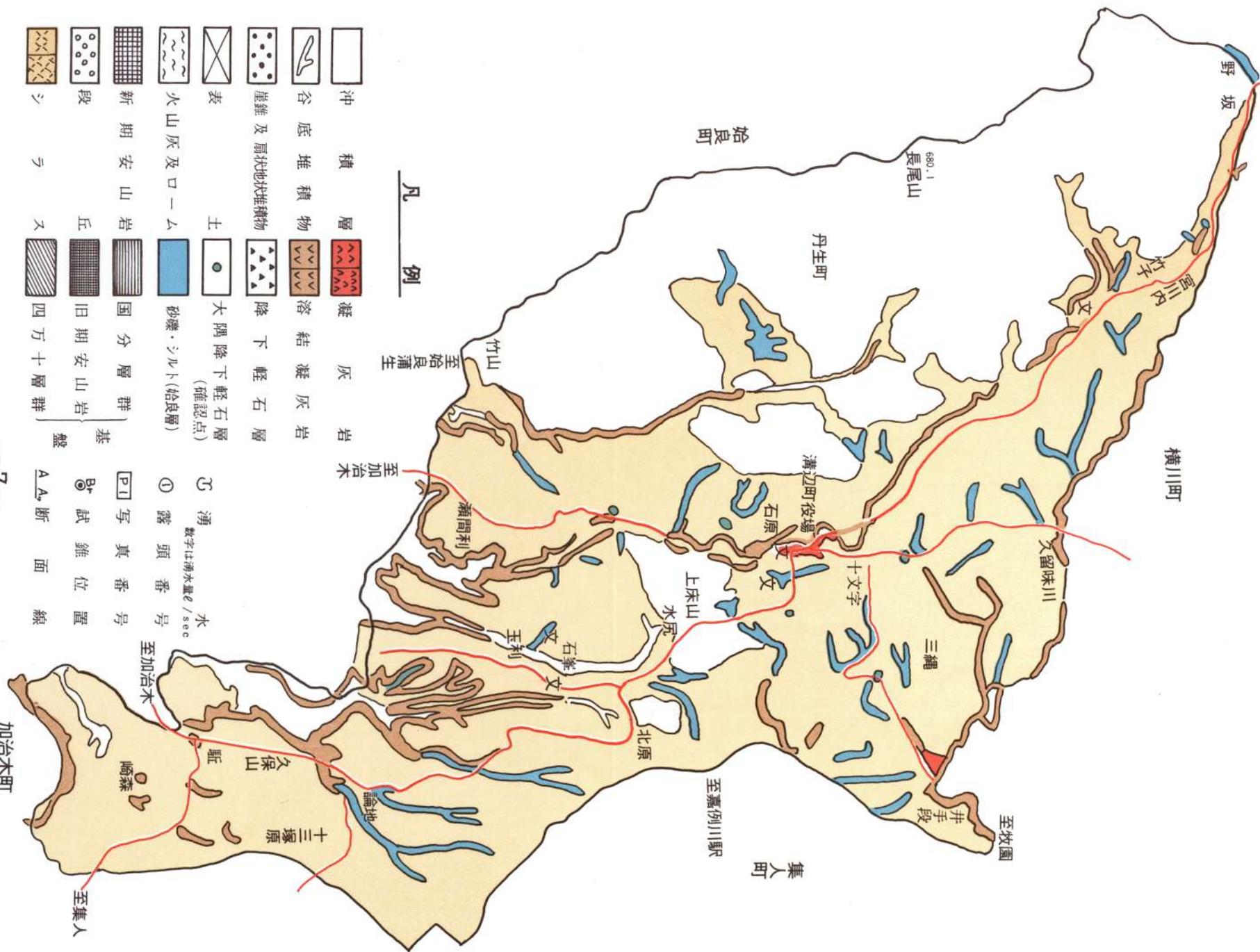
東南方台地の遠景

地質 年代表

絶対年代 (単位100万年)		相対年代			地殻の歴史		生物の変遷											
いま	からえ	長さ	代	紀	世	気候の遷	日本の地点	動物界	植物界									
1000	26	1	新	第四紀	沖積期	後氷期 (温暖化) 4回の氷	アルプス造山	人類の出現 ホニウ類鳥	被子植物の発展									
										25	生	第三紀	鮮新世	新しだい	温暖	山曲	繁栄の繁栄	被子植物の発展
	70	中	白亜紀	漸始新世	温暖	山骨き	カウアイ鳥類の出現	被子植物の発展										
									135	生	ジュラ紀	南半球の氷河	温暖	環太平洋	アンモナイト	裸子植物の出現		
																	180	代
	225	古	二疊紀	南半球乾燥	温暖	向斜地時代	両生類の繁栄	大形シダ植物の出現										
									270	80	石炭紀	北半球乾燥	温暖	両生類の繁栄	大形シダ植物の出現			
																350	生	デボン紀
	2000	500	60	代	オルドビス紀	温暖	両生類の繁栄	大形シダ植物の出現										
									440	40	シルル紀	温暖	両生類の繁栄	大形シダ植物の出現				
															500	100	カンブリア紀	温暖
600	先カンブリア代	一部乾燥	少くとも2回の氷河期	魚類の出現	海藻													

※ 洪積世を更新世ともいう。

至永野 (二) 地質図



凡例

- | | | | |
|--|-----------|--|-------------------|
| | 沖積層 | | 凝灰岩 |
| | 谷底堆積物 | | 溶結凝灰岩 |
| | 崖維及扇状地堆積物 | | 降下軽石層 |
| | 表土 | | 大隅降下軽石層
(確認点) |
| | 火山灰及ローム | | 砂礫・シルト(始良層) |
| | 新期安山岩 | | 湧水
数字は湧水量ℓ/sec |
| | 段丘 | | ① 露頭番号 |
| | シラス | | 写真真位置 |
| | | | 試錐位置 |
| | | | 断面線 |

月日	標尺 (m)	深度 (m)	層厚 (m)	図表	名称	記事	備考
	0	1	1		灰土		<p>上止管</p> <p>400% 300%</p> <p>ストレーナー</p>
		3	2		砂質土		
		10	7		砂混り礫		
2 19		12	2		砂		
2 20							
2 21					凝灰質		
2 22	20				凝結凝灰岩		
2 23					凝結凝灰岩		
2 25	30				凝結凝灰岩		
2 27					凝結凝灰岩		
2 28	40				安山岩質		
3 1					安山岩質		
	50				安山岩質		
3 2	58	46			安山岩質		
	60				シラス質砂		
	67	9			シラス質砂		
3 3	70				礫混り 青色粘土		
	80				礫混り 青色粘土		
3 4					礫混り 青色粘土		
	90				礫混り 青色粘土		
3 5	96	29			礫混り 青色粘土		
3 6					風化		
3 7	100				堅硬		
3 8					堅硬		
3 9					堅硬		
3 10	110				安山岩		
11					安山岩		
12					安山岩		
13					安山岩		
14					安山岩		
15					安山岩		
16					安山岩		
17					安山岩		
18					安山岩		
3 19	130				安山岩		
	140				安山岩		
3 20					結土化している	掘止	
	150				結土化している	掘止	

第二節 地質

本町の地質を概観すると、町内に分布している岩石はすべて新第三紀以降のものである。このうちもっとも古い岩石は主として本町面積の約三分の一に当たる北西部の長尾山麓一帯の地帯に分布する輝石安山岩である。この安山岩は熔岩及び凝灰角れき岩の互層からなり、どの火山より流出したかは明らかでないが、おそらく新生代第三紀、中新世、鮮新时期の旧期火山噴出と考えられている。

本町最高長尾山の頂上の標高は六〇〇メートルと地図に記録されている。

次に高屋山陵及び上床山付近一帯を除き、東南部の十三塚原を中心とする残りの約三分の二に当たる地帯は、ほとんどシラス地帯で、特に十三塚原台地は県下でも有名な台地の一つであるが、このシラス地帯は始良火山活動に伴う軽石流の二次堆積層であるといわれている。

始良火山は更新世の終わりに活動がはじまったといわれており、大量の軽石流を少なくとも数回にわたって流出し、そのため世界的にもその規模の大きなことは有名で、実に巨大な陥没カルデラの形成をみたのである。鹿児島湾の桜島火山以北の部分がこれにあたる。本

町はこの地の北東から北の方向にあるわけだが、北東から北西にわたる地域内でみられる火山軽石流は下位から新川軽石流、岩戸軽石流、蒲生軽石流、入戸軽石流に分けることができる。これらの軽石流の間には始良層と称する淡水成堆積物がはさまれていることがある。また入戸軽石流の上には同軽石流の二次堆積層が載っている。入戸軽石流は始良カルデラの形成直前に大量に流出し岩戸軽石流や蒲生軽石流の上に載り、この北部地方一帯を厚く広く覆ったと考えられている。

なお、高屋山陵の南の谷で観察しても、岩戸軽石流の表面はかなり起伏しているので、入戸軽石流の流失以前にはかなりの侵食間けきがあったと思われる。

この軽石流は熔結部と非熔結部とに分けられ、熔結部は灰青色を呈し、嘉例川やその他で見られるように柱状節理を連ねた断がいをなしてあらわれ、堅くち密で安山岩火山礫を包有している。

次に十三塚原台地の地層をみると、上位の黒色火山灰層は、ローム層の上に不整合に載り厚さ一〇〜五〇センチメートル位あり、黒色粗雑な火山灰からなり、おそらくこれは桜島火山に由来する現世の堆積物だろう。

黒色火山灰層の下位は、ローム層でそのローム層は上部、中部、下部の三層に分けられる。

上部ローム層は厚さ一〇〇〜二五センチメートル位あって橙黄色ロームからなっており、中部ローム層は厚さ三〇〜五〇センチメートル位あってかつ色ロームからなり基底にあづき大の黄色軽石が散点することがあり、また上限は黒色を呈している。

下部ローム層は厚さ二〇〇〜五〇センチメートル位あってかつ色ロームからなり、上限は黒色を呈する。

ローム層の低位は、シラスが広く分布し、その厚さは三〇〜一〇〇メートルに達している。この層はこの低位にある入戸軽石流の表面が削くはくされ、当時の低地と北西部の山岳地との間に再堆積したもので、その岩相は一見入戸軽石流のそれに似ているが、岩質ははるかに軟弱で崩れやすい。

またこの層はこぶし大以下の円味を帯びた軽石塊が軽石質微田片とともに堆積したもので、ときに砂層をはさみ、あるいは層理を示し、またへん平な形状の軽石塊は一般に横がしている。

この二次堆積層の断面がもつともよく観察できるのは単人町西光寺の西の谷で、ここでは高さ一〇〇メートルにも達する垂直に近いがけに多くの雨刻が深く刻み込まれており、がけはくずれやすい様相を呈している。

次に高屋山陵、上床山附近一帯のことを考えてみた

い。

国分層群堆積後に火山活動によって生じたものに、蒲生市街地の青敷山と高屋山陵、上床山附近の岩石がありこれらは新期安山岩類に属している。前者は青敷玄武岩質安山岩といわれ、後者は高屋安山岩と称せられている。シラス台地から突出してそびえる高屋山陵、上床山の岩石は安山岩および凝灰角礫岩から構成され、いづれもほぼ同時期の火山の噴出と思われ、高屋、上床山の中間には国分層群上部層と思われる塊状灰色凝岩があらわれしており、また高屋山陵の南側道路は中部層と思われる凝灰質砂岩、同けつ岩の細かい互層がみられるが、これらは著しくみだれており、走向、傾斜は一定していない。しかしこの安山岩は明らかに国分層群の上に載っており、ときに断層で接している。

熔岩は濃黒色で、ち密で堅く、長さ一ミリメートル以下の斜長石及で輝石班晶が比較的密に散在している。班晶は斜長石、紫蘇輝石、普通輝石からなり鉄鉍を伴う。斜長石は曹灰長石に属して柱状を呈し、また普通輝石は柱状で淡緑色を呈している。

凝灰角礫岩は鶏卵位より人頭大の安山岩岩塊を火山灰火山礫とともに凝結したものである。地質調査所発行の「加治木地域の地質」より

第三節 土 性

以上北西部の長尾山岳地帯、高屋、上床山付近地帯及びシラス台地帯について地質の概略を述べてきたが、次に本町の地質図と有川麦牟田の水田のボーリング実施に基づき地下の実態状況調は前に添付してある。

ちなみに昭和四十四年二月、有川麦牟田三一〇番地の水田を掘削したところ、地質柱は次のとおりである。

深 度 (メートル)	地 質
〇—一	沖積層 表土
一—三	砂質土
三—一〇	砂礫
一〇—一二	砂
一二—五八	熔結凝灰岩
五八—六七	シラス質砂
六七—九六	礫混り青色粘土
九六—一五〇	安山岩

付記

このボーリングは町営上水道用にしたもので一日当り二千立方メートルの揚水があったが、沖積層からのよう水が鉄分過多のため、沖積層よう水を除去したところ、一日当り揚水量は一、四〇〇立方メートルに減じた。

土性は安山岩、灰岩に由来する粘質岩の竹子水田地帯と、シラス(黒色火山灰)に由来する砂質系の麓、崎森の畑地帯と、その中間に位する有川三繩地帯の三つの地帯に大別することができる。

本町のほとんど全畑地帯は、黒色火山灰土で上層は黒色(黒ニガ)下層も黒色、または赤かっ色(黒ニガまたは赤ポッコ)の特殊土壌である。

水田地帯中で、竹子地区の山間部には礫質礫層が多く耕土も浅く、その上冷水田が多く、平坦部は比較的作土も深く、地味も豊かで上質田となっている。

有川、三繩地区の水田は砂壤土(壤土に近い)で、地力中庸であるが、湿田、半湿田も多い。

麓、崎森地区の大部分の水田は、シラス台地にはさまれて一般に砂質が多く、作土以下はシラス層となっているため、地下水位の低い所では漏水過多となって、地下水位の高い排水不良な所では、湿田または半湿田となっている。

本町の土性を百分比で示すと次のとおりである。

砂土	砂壤土	壤土	殖壤土	計
田 二〇%	二五%	四五%	一〇%	一〇〇%

畑 一〇% 三〇% 五五% 五% 一〇〇%

参考文献

- 1 鹿児島市の自然（地史と岩石） 県地学会編
- 2 同 （地質ガイドブック）
- 3 加治木地域の地質（地質調査所）
- 4 地質図（南九州総合地域開発事務局）

第三章 気候・動植物

第一節 気候

本町の年間平均気温は一六・五度位で、一般的に高温多雨であるが、下場（加治木、隼人町）に比べて冷涼である。気温較差は小さく約九度の差を示している。

最低気温を見ると、七月に二一・二度で高く、十一月

気象観測 昭和三十年溝中調

区分	月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
最高気温	八・六度C	一一・四	一五・三	二一・一	二二・八	二五・一	二九・〇	三一・一	三二・一	三三・一	三三・四	三三・六	三五・九	三〇・七
最低気温	〇・七度C	三・一	八・五	二・九	一三・九	一七・七	二一・二	一九・七	一七・一	九・九	三・八	五・五	一一・一	

() 内は玉利中調（昭和三十六年）

になると急激に下り、三月以降徐々に高くなる。

最高気温は八月が、三一・一度で平坦地区と余り変らないが、最低気温と同様、十一月から二月までは低い。

降雨量はすこぶる多く、特に六月、七月で約一、二〇〇ミリメートルを越えることがある。

また県内の主な地域と比較して見ると、最低気温は県の中心地であるためほぼ中間の気温であって、平均気候で見ると鹿児島市と大差はないが、降雨量は他の地域に比べて遙かに多い。

風について見ると、夏季気節風の影響が大きく東風及び南東風が雨を伴って襲来するため、土砂を流し農作物を倒伏するなど毎年被害が繰り返されている。

冬季のつむじ風（風速一〇メートル位）はたいした心配はないが、夏季の台風にはひとびとが恐れている。

項目	初霜 十月二十日 (大正十五年)	晩霜 四月二十二日 (昭和四年)	玉利中 十月十九日	溝中 四月八日	平均気温	低温較差	降水量	晴天日数	雨天日数
	四・三・C	八・〇・度C	七・九・度C	八・三	七・二・C	七・二・C	一〇・二・C	三二	一〇日
	七・四	六・四	八・三	六・八	一四・二・七	一四・二・七	七・六	一八	一〇
	一一・八	九・三	六・八	八・二	二七・九・七	二七・九・七	五・八	二	二〇
	一六・二	一九・五	八・二	八・二	三四七・四	三四七・四	一九四	一九	一一
	一八・九	一九・一	八・九	八・九	二九〇・三	二九〇・三	一六六	一九	一三
	二二・九	二〇・六	七・四	七・四	八〇九・八	八〇九・八	四六一	五	二五
	二六・二	二六・五	七・八	七・八	四六〇・五	四六〇・五	一五〇	一三	一八
	二七・八	二六・五	一一・四	一一・四	二六三・六	二六三・六	二九	一六	一五
	二四・三	二四・七	一一・〇	一一・〇	三四三・六	三四三・六	一六七	三三	八
	一八・六	一八・九	一三・五	一三・五	六三・八	六三・八	九四	二六	五
	二二・五	二二・七	一三・八	一三・八	七八・二	七八・二	六三	三五	五
	一〇・六	七・九	一〇・四	一〇・四	八五四	八五四	四七	三五	八
	一六・六	一六・七	九・六	九・六	二六八・八	二六八・八	一八三・九	一七・八	一二・二

第二節 動植物

本町では、前の地形気象の節で述べたとおり、山林原野の示める地帯が割りに多く、また氣候等も良好で動植物の捷息環境に適しているため、多種多様にわたる動物が生存している。その主なるものを列記すると次のとおりである。

一 動物

1 飼育されているもの

2 自然に捷息しているもの

乳牛、和牛、豚、馬、山羊、犬、うさぎ、ねこ、にわとり、きじ、めじろ、ほおじろ、のじこ、あひる、七面鳥

いのしし、さる、たぬき、いたち、ねずみ、むさび (もま)、のうさぎ、こうもり、もぐら、あおだいしょう、まむし、とかげ、かなへび、むかで、じょうろうぐも、かたつむり、なめくじ、とのさまがえる、ひきがえる、つちがえる、あまがえる、いも

り、いしがめ、てながえび(だつま)、かに、たにし、しじみ、

からす、すずめ、のじこ、ほおじろ、ひばり、せぐろせきれい、りきせきれい、めじろ、しじゅうがら、もず、かわせみ、きつつき、ひよどり、うぐいす、みそさざい、よたか、ふくろう、こみみづく、とび、きじばと、うずら、こじゆけい、きじ、やまどり、

つばめ、あかしょうびん、ほととぎす、かも、さんこうちよう、

あげはちよう、きあげはちよう、くろあげはちよう、じゃこうあげはちよう、ながさきあげはちよう、もんきあげはちよう、からすあげはちよう、もんしろちよう、きちよう、あかたてはちよう、うらぎんひんちようもんちよう、

よとうが(よとうむし)、おおみのが(みのむし)、にかめいが、さんかめいが、こめのしまめいが、あかいえか、おおくろやぶか、ひとすじしまか、ががんば、うしあぶ、あかうしあぶ、いえばえ、きんばえ、にくばえ、おおくろばえ、しょうじようばえ、あり、しろあり、すずめばち(赤ばち)くまばち、みつばち、げんごろう、みすすまし、が

むし、こがねむし、かぶとむし、ほたる、たまむし、てんとうむし、かみきりむし、うりはむし、かまきり、ごきぶり、けら、こおろぎ、すずむし、まつむし、くつわむし、きりぎりす、やぶきり、ばつた、とんぼ、おにやんま、かめむし、あめんぼ、まつもむし、たいこうち、みじかまきり、たがめ、あぶらぜみ、くませみ、ひぐらし、だに、ふたじらみ、にはとりながはじらみ、

めだか、どじよう、なまず、あぶらめ、たなご(もつごろ)、こい、ふな、うなぎ

二 植物

1 栽培しているもの(主食、野菜、果実)

水稻、陸稻、小麦、裸麦、ビール麦、あわ、そま、きび、ばれいしょ、甘しょ、大豆、あづき、えんどう、なたね、たばこ、茶、とまと、きうり、なす、白菜、キャベツ、玉ねぎ、大根、かぶ、ねぎ、ごぼう、しいたけ、なし、桃、柿、栗、梅、びわ、みかん類、ぶどう。

2 樹木

(ア) 常緑樹

杉、赤松、くろ松、桧、もみ、しい、かし、いち

いがし、たぶ、いす、椿、山つげ、さざんか、山もも、黒がねもち、なんてん、いぬまさ、やつで、いぼたのき、ねずみもち、

(イ) 落葉樹

さくら、いちよう、くぬぎ、こなら、けやき、えのき、くわ、せんだん、きり、あおぎり、さるすべり、はぜ、うるし、こうぞ、いぬびわ、

3 竹類

もうそうちく、はちく(からだけ)、ほていちく(こさんだけ)、しかくだけ、めだけ(なえだけ)たいみんちく(大明だけ)、かんざんちく(ほうきだけ)、おかめざさ(めごだけ)

4 雑草(昭和四十四年十一月溝小理研究誌)

- ㊸ ありうばな、あけび、あれちのぎく、あまくさしだ、あわだちそう、あざみ、あぶらすすき、あわがえり、あぜむしろ、あきのきりんそう、ありのとうばな、あおかずら、あめりかかなもち、あきたぶき
- ㊹ いばら、いぬたで、いたちがや、いぬくぐ、いぐさ、いとよし、いぬせんまい、いぬわらび、いのこづち、いわひば、いわなし、いぬよもぎ
- ㊺ うまのみつば、うしはこべ、うつほくさ、うまの

あしがた、うすべににがな、うばゆり、うつほかず

ら、うすむらさきにが、うらぎく

㊻ えのきざさ、えびずる、えのころぐさ、

㊼ おとこえし、おとこよもぎ、おおぼこ、おみなえ

し、おかひちき、おとぎりそう、おきなぐさ、おい

いもした、おいしわ、おういぬだて、おかとらの

お、おうじのひげ

㊽ かやつりぐさ、かわらまつば、からむし、かきど

おし、からすうり、かもじぐさ、かなむぐら、から

すびしゃく

㊾ きつねのまご、きつねのぼたん、ぎょうきしば、

きぬたそう、きんみずひきそう、きんえのころぐ

さ、ぎんらん、きずた、

㊿ くじゃくしだ、くまやなぎ、くわのはぐさ、くず

かずら、くるまぐさ、くまささ、くさいちご、くさ

ぼたん、くるまばな、

㊺ げんのしょうこ、けきつねぼたん、

㊻ こもちしだ、こまつなぎ、こめでしこ、こぶな

ぐさ、こんぎく、こんにやく、こごめでしこ、こ

がんび、こみかんそう、こうもりずた、こうやすげ

㊼ さるとりいはら、さねかずら、さくらそうもど

き、さつまのこんぎく

㊽ しのぶひば、ししうど、じゃのひげ、じしぱり、

しおん、しろばなのへびいちご、ししがしら、しら
こすげ、しろのぶ

㊦ すずめのひえ、すすき、すまだいこん、すぎこ
け、すずめのとうがらし、すいば、すいかずら、

㊧ せんりんそう、せんまい、

㊨ たんどのぼろぎく、たけにぐき、たちすみれ、た
んきりまめ、

㊩ ちごしば、ちぢみかさ、ちぢみささ、ちちこぐ
さ、ちやるめるそう、

㊪ つゆぐさ、つた、つづら、つぼくさ、つるしの
ぶ、つりがねそう、つわぶき、

㊫ てっぼうかずら、ていかかずら、
ともえはぎ、どくだみそう、ともえほし、とらの
お、とうげしば、とだしは

㊬ なるこびえ、なつのたむらそう、なんばんぎせ
る、ながばなのちぢみささ、

㊭ にがいちご、にがよもぎ、にしきそう、
ぬすびとはぎ、ぬるで、ぬまだいこん、

㊮ ねずみのお、ねこはぎ、ねずみかや、ねずみのし
っぱ、ねこほうづき

㊯ のぶどう、のぎらん、のふぢ、のこぎりした、の
どはぎ、のぼたん、のかんそう、のだけ

㊰ はぎ、ばらいちご、はっか、ばしょう、はえどく
そう、ははきぎく、はなみようが、えどくそう

㊱ ひめむかしよもぎ、ひるむしろ、ひめくぐ、ひめ
とらのお、ひるがお、びろーどしのぶ、ひめがんく
びそう、ひかげのかずら、ひほしおん、ひよどりば
な、ひめじよん、ひめちからしば、ひめあぶらす
き、ひめはぎ、びんびんかずら

㊲ ふじばかま、ふゆいちご、
へくそかずら、べこのした、へらしだ、べにしだ
ほととぎす、ほらしのぶ、ほとけのぎ、ぼたんづ
る、ほろおばな

㊳ まむしぐさ、まいはぎ、ままこのしりぬぐい、ま
つかぜそう、まかや、まるばあさがお、まめづた、
まつかさすすき、はるばはぎ、ままだいこん、

㊴ みぞそば、みつば、みそなおし、みずひき、みず
きばし、みみかきぐさ、みつてうらほし

㊵ むかしよもぎ、むさしおぶみ、むさしあおい
めいしわ、めなもみ

㊶ もくげ
やましそ、やはすそう、やまいも、やましろぎ
く、やぶそてつ、やまかさすすき、やくしそう、や
ままめ、やぶたばこ、やぶたびらこ、やまほととぎ

㊷ やましそ、やはすそう、やまいも、やましろぎ
く、やぶそてつ、やまかさすすき、やくしそう、や
ままめ、やぶたばこ、やぶたびらこ、やまほととぎ

㊸ やましそ、やはすそう、やまいも、やましろぎ
く、やぶそてつ、やまかさすすき、やくしそう、や
ままめ、やぶたばこ、やぶたびらこ、やまほととぎ

㊹ やましそ、やはすそう、やまいも、やましろぎ
く、やぶそてつ、やまかさすすき、やくしそう、や
ままめ、やぶたばこ、やぶたびらこ、やまほととぎ

第四章 人口・地名

第一節 人口

す、やなぎたで、やまゆうばな、やまはっか、やがみようが、やえむぐら、やげぎだて、やぶこうじ、やなぎのぎく、やいとばな、やまよめな

よもぎ、よめな

わらび

らん類

参考文献

1 新日本植物図鑑

北隆館

2 標準原色図鑑Ⅰ卷昆虫

保育社

Ⅰ卷蝶、蛾

Ⅷ卷樹木

教材混虫、小動物飼育法

松沢寛著

溝辺小理科研究誌(四四年)

本町の人口は逐年除々ながら増加していたが、昭和三年をピークに減少の一途をたどった。これは農業から工業重点主義の経済政策に基ずく、農村人口の都市転出による自然の傾向のしからしむるところである。

他面昭和三十五年ごろから顕著にあらわれた出生減はこれに拍車をかけることとなり、人口の年令構成は老化現象の一途をたどることとなるが、昭和四十七年空港開設とともに漸次人口増加のきざしを見せはじめている。

次に最近の本町の人口動態の状況と、年令別人口の実態を示すと次表のとおりになっている。

一人人口趨勢

年次別	区分		人			大正九年を100とした場合の人口指数	備考
	戸数	総数	男	女	口		
大正九年	一、三三〇	六、〇九六	二、九九三	三、一〇三	一〇〇		
昭和四年	一、三三六	七、〇三六	二、九七九	三、〇五七	一〇〇・二		

第二節 地名

本町内五大字、小字は四六五で左図のとおりである。



八〇〇八四〃	五六	二〇	三六	七四	三八	三六	七三	三三	四〇
八五〃八九〃	二〇	五	一五	二九	八	二	二八	一四	一四
九〇〃九四〃	二	一	一	一〇	三	七	四	二	二
九五〃九九〃	〇	〇	〇	一	〇	一	一	〇	一
一〇〇〃〃	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
計	八二五九	四〇七六	四一八一	七二二五	三九五二四	三、七、七、一〇	六、四、四、六	三、一、五、一	三、三、九、五



麓

第三節 部落別世帯数と人口

本町は行政の末端浸透を駐在員制度によって推進している。

現在三十一の駐在区と役場直轄(鹿児島空港周辺など)の区域を定めて、行政の円滑を図っている。
駐在区別に世帯数と人口を示せば次のようである。

四	三	二	一	区/項目	
				部落	世帯数
中門元切 有門切切 川田明明	部上中森中 落森森園園 外園園園園	瀬 間 利	東竹 竹山山 山山	昭和四十六年	昭和四十七年
七 一 五 五	二一〇二二 二〇〇〇五	三三	一三二二	人口	人口
一六 三九 二四 二一	四八 三六 八五 七九	一〇七	五二七四	世帯数	世帯数
七 四 五 八	一四九二二 一四九二四	三五	一二二二	人口	人口
二〇 四五 二〇 二七	一四八 三六 八三 七五	一〇四	四八七三		

	九	八	七					六	五		
中十 十文 文字	新木 香場	部丹 落生 外附	部白 落石 外(住)	白倉 石ノ 山	大倉 王	谷口	金久 割(住)保園	上石 原	中石 原	部現 落王 外住宅	田寺 畑藏 口
二〇 一〇	一六 一七	四〇	一〇 一〇	一一 一三	一一 一六	一六 一九	一八 一八	三三 三四	四〇 四〇	二七 二七	二二 二二
七五 三六	六一 七四	一六 二二	二二 二五	三〇 三七	二九 三五	五五 三〇	六八 三八	一三 一五	一三 一三	二一 二一	七一 七一
一六 一二	一八 二〇	二四 二二	二二 二八	一一 一三	一八 一六	一一 一一	二一 二一	三七 三七	四一 四一	二八 二八	二三 二三
五一 四〇	六五 六五	一三 三〇	三八 二〇	三三 三二	三六 三六	五七 二九	六七 六七	二九 二九	一一 一一	二二 二二	七七 七七

一五		一四		一三		一二		一一		一〇														
下 宮 原	上 宮 原	部 落 外	野 坂	協 和	平 和	下 宮 川 内	上 宮 川 内	部 落 外	石 井 口	宮 脇 下	栗 下	幸 生	計 牛 住 宅	計 牛 宅	極 楽 園	祝 儀 園	部 外	池 畑	早 岡	今 住 宅	今 別 府	今 別 府	坂 ノ 上	
一 四	一 五	一 四	五	一 五	〇	三 九	三 七	一 〇	二 〇	四 〇	六	三 三	三 〇	三 一	二	六	四	三 六	六	二	六	四	三 六	六
四 二	四 一	五	一 九	一 九	二 四	一 三	二 四	二	八 六	一 四 三	二	一 〇	一 〇	二 一	三 一	三 八	二 〇	一 六	一 四	五	二 八	二 八	二 八	
一 五	一 六	一 四	五	一 〇	四 〇	三 四	四 〇	一	二 三	二 六	三 八	四 五	三 八	二 七	三 一	三	二	六	四	八	一 〇	一 〇	一 〇	
三 六	三 八	五	一 七	一 八	二 二	二 九	二 四	一	八 二	一 四 〇	一	一 四	九 四	九 三	二 〇	六	三 六	一 九	一 三	一 四	四 三	三 〇	三 〇	

一二		一一		一〇		〇九		〇八		〇七		〇六		〇五									
内 門	中 石 峯	元 石 峯	石 石 峯	上 石 峯	片 石 峯	北 馬 場	北 原	鳥 越 原	〃 東	房 山	橋 之 口	横 頭	中 水 尻	〃 西	水 尻 東	中 野	木 佐 貫	井 手 段	荻 迫	今 向	桑 迫	宮 久	
一 〇	一 三	四	一 九	四	三 二	三 二	二 七	一 三	二 二	一 七	三 四	二 八	一 七	二 八	四 三	二 八	四 三	二 三	四 一	一 六	一 八	二 三	
三 二	四 五	一 六	四 三	二 七	一 五	二 八	二 八	四 九	一 五	六 八	一 五	二 六	五 八	五 八	一 二	一 五	八	七 〇	一 三	九	五 六	六 五	八 二
九	一 〇	四	二 一	四	三 〇	三 〇	二 三	一 三	二 二	二 三	三 九	二 二	一 〇	一 八	二 七	四 三	二 五	二 五	四 一	一 八	一 八	二 四	
三 一	三 五	一 三	四 〇	三 〇	一 一	一 九	七 七	四 五	九	五	七	一 五	二 四	五 一	五 四	一 一	一 五	七	六 八	一 四	〇	七 七	

